

Microsoft 365 Copilot Researcherの「Critique」 「Council」と知財実務への影響

調査時点: 2026-04-26 JST

エグゼクティブサマリー

Microsoft ¹ は2026年3月30日、Microsoft 365 CopilotのResearcherに「Critique」と「Council」を追加し、生成と査読を分ける直列型のマルチモデル構成と、複数モデルの結論差を並列比較する比較モードを導入した。公式サポートでは、Anthropicが有効化されている場合のAutoがCritiqueを用い、GPTで下書きを作成し、Claudeで第二の推論パスを与えて構造・完全性・引用を強化すると説明される。CouncilはGPTとClaudeを同時実行し、それぞれの完全なレポートを保持したうえで、一致点・相違点・各モデル固有の貢献を要約する。現時点ではこの新しいAuto/Model CouncilはFrontierプログラムでの早期提供であり、一般公開前の実験的機能として変更可能性が明示されている。 ²

知財実務への本質的なインパクトは、「どのモデルが強いか」という一点よりも、調査とレポート作成の作法そのものが、**一次生成→批判的再検証→比較読解→人間の採否判断**に再編される点にある。単一の見解を素早く整えたい局面ではCritiqueが有利であり、争点の切り方・クレーム解釈・リスク配分・交渉ポジションのように複数の妥当な読みがありうる局面ではCouncilが有利である。とくに特許無効・訴訟支援、ライセンス交渉、発明の抽象化と実施形態の切り分け、著作権論点の両論整理では、この差が実務上大きい。 ³

一方で、導入判断を甘くしてはいけない論点も明確だ。第一に、公式文書はCritique/Councilで用いられる**正確なモデル版**を特定しておらず、同時期にCopilot全体でGPT-5.2、GPT-5.4 Thinking、GPT-5.3 Instantが利用可能になっていることは確認できるものの、Researcherの各モードがどの版に固定されるかは公開されていない。第二に、MicrosoftのDRACO評価は有意差のある改善を示すが、Critiqueの改善は主として**既存に取得したソースの使い方**を良くする方向であって、ソース探索の網羅性そのものを保証するものではない。第三に、法務・知財は高ステークス領域であり、DRACO論文自体も法務分野ではネガティブ評価基準の比率が高いことを示している。したがって、先行技術の取りこぼし、裁判例の誤読、属地主義の見落とし、出願・契約提出直前の無批判利用は依然として高リスクである。 ⁴

結論として、知財部門・法務部門・法律事務所が採るべき実務方針ははっきりしている。**短期**には、非提出物・非最終版のメモ、争点整理、発明者インタビューの要約、先行技術候補の棚卸しなどに限定したパイロットから始める。**中期**には、Matter分類、許容ソース、Critique/Council/単独モデルの使い分け、監査ログ、DLP、人的レビューを含む統制設計を整える。**長期**には、社内ゴールドセットで継続評価し、特許・商標・著作権・契約の各領域で「どこまでAIに任せるか」を役務別に分解した運用基準へ落とし込むのが妥当である。 ⁵

前提と未指定事項

本件では、利用組織の規模、Microsoft 365 Copilotライセンスの配備状況、Frontier参加有無、Anthropic有効化の有無、文書管理基盤 (iManage、NetDocuments、SharePoint中心か否か)、機密区分、依頼者秘匿と弁護士秘匿特権の運用、許容される外部Web調査範囲、EU・米国・日本案件の比率、既存の特許/判例/商標データベース契約は未指定である。そのため以下では、**大企業の知財・法務部門、中小・スタートアップの知財担当、法律・特許事務所**の三つの一般的シナリオを置き、公式仕様で確認できる範囲と、そこから合理的に導ける実務影響を分けて論じる。なお、ソース優先順位は、公式サポート・Microsoft Learn・ロード

マップ・監査/セキュリティ文書、OpenAIおよびAnthropicの公式発表、学術論文、次いで日本語専門メディア、最後にコミュニティ上の利用者反応とした。⁶

想定シナリオ	期待効果	制約・注意点	実務上の含意
大企業の知財・法務部門	内部文書、会議、メール、Webを横断した一次整理と、Purview・DLP・監査ログ・権威ソース管理を組み合わせやすい。 ⁷	Anthropic有効化、データ境界、監査・保持・承認ワークフローの設計が前提になる。 ⁸	Critiqueを標準、Councilを高争点Matterに限定する統制が取りやすい。
中小・スタートアップ	発明メモ整理、契約レビュー下書き、競合技術調査で即効性が出やすい。 ⁹	専任ガバナンス人員が少なく、モデル選択ポリシーと秘密情報ルールを簡素にしないと運用が崩れやすい。 ¹⁰	用途を「提出前の叩き台」に限定し、機密レベル別の禁止事項を明文化する必要が高い。
法律・特許事務所	内部ナレッジ、議事録、過去案件メモの再利用、契約・意見書の構成支援に適する。 ¹¹	特権・守秘義務、依頼者ごとの情報隔離、直接提出物の責任所在が厳しい。 ¹²	Councilは意見対立整理に有用だが、最終法的判断の外部委託として扱ってはならない。

機能概要と技術解釈

公式仕様から確認できるCritique/Councilのコアは次のとおりである。ResearcherはOpenAI系とAnthropic系の複数モデルを選択可能にし、AutoではAnthropicが有効な場合にCritiqueが既定となる。CritiqueはGPTでレポートを生成し、Claudeで第二の推論パスを与えて構造・完全性・引用根拠を強める。Councilは複数の深い推論エージェントに同一質問を同時投入し、各モデルの独立レポートを保持したうえで、専用のjudge modelが一致点・相違点・固有貢献を要約する。ここで重要なのは、Councilの“要約”自体もまたモデル出力であり、**真偽の最終判定者**ではないことである。さらに、Microsoftはこの設計が将来的に役割を拡張できる「optionalが高いアーキテクチャ」だと説明しており、運用側は固定仕様ではなく変更可能なパイプラインとして扱うべきである。¹³

同時に、**正確なモデル版は未指定**である点を明示しておく必要がある。Researcherのサポート文書は単に「GPT」「Claude」と記す一方、Microsoft 365 CopilotロードマップではGPT-5.2、GPT-5.4 Thinking、GPT-5.3 InstantがCopilotで利用可能とされる。しかしCritique/Councilにどの版が割り当てられるか、judge modelが何か、将来どのタイミングで差し替わるかは、調査対象の公式文書では確定できなかった。ゆえに、モデル選択ポリシーは「GPT系は長文統合と多段実行に比較的強い」「Claude系は長時間エージェント動作と指示追従・安全性の一部で強みを持つ」という**公開モデル特性に基づく仮説**として設計し、版固定の期待を置かない方がよい。¹⁴

Researcher自体のプロンプト設計については、Microsoft Learnがかなり実務的なヒントを出している。具体的には、**具体的な質問**をすること、**検索範囲をWeb・社内・両方のどれにするか明示**すること、そしてResearcherが返す**明確化質問に回答**することが推奨される。公式デモでもCouncil利用時にレポート長などの明確化質問が行われており、ここは単なるUIの飾りではなく、出力品質を左右する制御点とみるべきである。知財実務では、ここに加えて「対象国」「対象期間」「対象権利」「禁止ソース」「必要証拠形式」「未確定論点の列挙」「反対説の併記」を明示することが、Critique/Councilの両方で効く。¹⁵

出力の説明責任については、Researcherは単なる自然文応答より一段進んでいる。公式デモでは、Critique後のレポートが**source reliability**、**report completeness**、**strict evidence grounding**を重視していることが示され、WordではWebまたはWork IQ由来の情報に対して引用表示が追加され、法務・コンプライアンス

向けのWord機能ではTrack Changesとコメントが監査証跡を支える。加えて、Purview監査では、プロンプト、応答、アクセスされたリソース参照が自動記録され、eDiscovery・保持・調査が可能である。したがって、Copilotの説明責任は「なぜその法解釈が正しいか」を数理的に説明する**理論的説明可能性**ではなく、「どの資料に基づき、どのドラフトを、誰が、いつ、どう修正したか」を後追いできる**運用上の説明可能性**として理解するのが適切である。¹⁶

以下は、公式文書をもとに整理した簡略フローである。Critiqueは直列型、Councilは並列比較型である。

17

flowchart LR

```

A[ユーザープロンプト] --> B{Researcherのモード}
B -->|Auto / Critique| C[GPT系モデルが計画・検索・初稿生成]
C --> D[Claude系モデルが査読・構造補強・引用確認]
D --> E[単一の最終レポート]
B -->|Model Council| F[GPT系モデルが独立レポート生成]
B -->|Model Council| G[Claude系モデルが独立レポート生成]
F --> H[Judge modelが一致点・相違点・固有貢献を要約]
G --> H
H --> I[比較可能な複数レポート + 要約]

```

モード別に見ると、知財実務上の使い分けは次のように整理できる。なお、Critiqueの改善はMicrosoftのDRACO評価で統計的有意差が示された一方、Councilについては同様のベンチマーク結果が今回の公式資料には提示されていない。したがって、Councilは「品質向上済み単一解」ではなく「比較可能な複数解」を得るための道具として扱うべきである。¹⁸

モード	公式な動作	向くタスク	説明責任の強み	限界
Critique	GPT初稿 + Claude再推論による内蔵レビュー。Autoの既定。 ¹⁹	一つのメモ、見解書、調査報告書、発明整理メモを整えたい場面。	最終レポートを一本化しやすく、引用・構造・完全性を強めやすい。 ²⁰	既取得ソースの使い方改善が中心で、網羅探索の保証ではない。 ²¹
Council	GPTとClaudeを同時実行し、各レポートと比較要約を返す。 ¹⁹	争点比較、複数立場の整理、反対説の探索、交渉準備。	一致点・相違点が見え、見落としを発見に向く。	judge summary自体もモデル出力で、最終真実判定ではない。 ²¹
GPT単独	GPTモデルの単独出力。 ²²	長文統合、構造化された一案の素早い作成。	ロジックの連続性を追やすい。	反対説探索が弱くなりやすい。
Claude単独	Claudeモデルの単独出力。 ²²	指示厳守、長時間の推論、保守的なレビュー観点を見たいとき。	指示追従・限界認識・一部安全性の公開評価が強み。 ²³	Copilot内の実装版は非公開で、公開ベンダー評価をそのまま当て込めない。

知財業務別インパクト分析

知財実務に当てはめると、Critiqueは「一つの提出用に近いドラフトを磨く」仕事に、Councilは「どの見方を採るかまだ決めない比較検討」に効く。特許・商標・著作権・契約・意匠・訴訟支援のどれでも使えるが、強みの出方は同一ではない。特に注意すべきなのは、Microsoft自身が説明するようにCritiqueの引用品質改善は主に**既存ソースの選択・引用の質向上**によるものであり、**ソースカバレッジ増加ではない**点である。よって、網羅性が要求される特許先行技術調査、無効資料の収集、商標クリアランス、意匠調査では、Researcherを専用データベースの代替ではなく**整理・比較・仮説形成層**として使うのが安全である。さらにDRACO論文では法務分野はネガティブ評価項目が相対的に多く、上位システム間の差も小さいため、「一般ベンチで勝っているから法務でもそのまま安全」とは言えない。²⁴

業務	Critiqueが効く場面	Councilが効く場面	主な利点	主な懸念	推奨統制
特許・先行技術調査	発明テーマごとの技術背景整理、候補文献の要約、サマリーメモ。	異なる検索観点、クレーム解釈、組合せ論の比較。	技術文書・社内メモ・Webを横断して一次仮説を早く作れる。 ²⁵	網羅探索の保証なし。特許DB収録差や非特許文献の偏りを残す。 ²⁶	専用特許DBでの再検索、検索式保存、最終文献表の人手確認。
特許出願草案作成	発明者インタビューや実験記録から開示書骨子を整える。	広い請求項/狭い請求項、作用効果の切り方を比較。	長文資料統合に強い公開GPT系の特性と、査読型レビューを使いやすい。 ²⁷	inventorshipの誤配分、サポート要件の不足、実施例の過大一般化。	発明者寄与のログ化、サポート要件レビュー、代理人承認前は社外提出禁止。
商標	指定商品役務案、使用実態の一次収集、競合ネーミング比較。	識別力・混同可能性・不使用リスクの見立て比較。	Councilで複数の評価視点を得やすい。 ²⁸	各国実務差、審査便覧依存、検索母集団の偏り。	国別データベースと実務書で二次検証。
著作権	作品関係・権利連鎖・AI生成物の関与整理メモ。	学習利用、引用、依拠性、フェアユース/権利制限の両論比較。	争点整理と比較表作成に強い。 ²⁸	各国法の不確実性が高く、学習利用訴訟も継続中。 ²⁹	純AI生成部分の著作権前提を置かない。国別法確認を必須化。
契約・ライセンス	契約要点の要約、差分説明、論点ごとの条項マップ。	licensor/licensee双方に不利な条項、代替案、譲歩順位の比較。	WordのTrack Changes・コメント・引用表示と相性がよい。 ³⁰	特権漏洩、相手ドラフトへの過剰追従、責任制限条項の見逃し。	赤入れはTrack Changes必須、機密条項は相手先匿名化、最終責任者レビュー。
意匠・デザイン保護	既存説明資料から意匠特徴の言語化。	類似/非類似の着眼点比較、出願範囲の説明差比較。	文章化・観点整理には有効。	画像類似検索は専用システム優位で、視覚的差異の微差は危険。 ³¹	画像検索系DBを別システムで必須併用。

業務	Critiqueが効く場面	Councilが効く場面	主な利点	主な懸念	推奨統制
技術調査・競合分析	技術動向、R&D、標準化、競合の公開資料整理。	投資/提携/訴訟可能性まで含めた複数シナリオ比較。	Work IQとWebの併用で社内視点を混ぜやすい。 ¹⁵	社内文書の古さや誤記がそのまま根拠化されうる。	権威ソース設定、日付フィルタ、社内資料の版管理。
無効審判・訴訟支援	争点表、時系列、既収集証拠の論点マッピング。	原告/被告、権利者/実施者などの立場差比較。	Councilで反対説や別構成が出やすい。 ¹⁹	架空裁判例・誤引用・証拠評価の飛躍は高リスク。	裁判例・証拠番号の元資料照合を必須化。
発明者インタビュー	面談メモ、論点抜け漏れの洗い出し、追加質問案。	技術的本質と周辺実施形態の切り分け比較。	Clarifying questionsの設計思想と相性がよい。 ¹⁵	AIが“発明”し始め、寄与者の境界を曖昧にする。	人間の技術的寄与記録を残し、AI提案部分を区分管理。
ライセンス交渉	条項別の論点整理、依頼者向け説明資料。	双方立場の主張筋、BATNA、譲歩順序の比較。	Councilが複数フレーミングを可視化する。 ¹⁹	AI要約を“市場標準”と誤認しやすい。	市場慣行・判例・法務経験則との突合を行う。

実務ワークフローとしては、たとえば**先行技術調査・無効検討**では、まずCouncilに「対象クレーム、優先日、対象国、許容ソース、除外ソース、必要証拠形式」を与えて複数の探索観点を揃え、その後人間が専用特許DBで再検索し、最後にCritiqueで一つのクレームチャート骨子へ収斂させるのが安全である。逆に**契約レビュー・依頼者説明メモ**では、最初からCritiqueで一案を作り、Wordの変更履歴・コメント・引用を残しながら人間が条項精査する方が速い。**発明者インタビュー**では、Researcherに明確化質問を許しつつ、抜けている構成要件、代替実施形態、作用効果、比較対象を抽出させ、その出力を人間がinventorshipの観点で再編集するのがよい。³²

導入・統制・契約設計

導入統制の起点は、CopilotがMicrosoft 365の**trust boundary**内で動き、既存のアクセス許可、感度ラベル、DLPを尊重するという前提をどこまで活かせるかにある。法務・知財文書では、この点は一般の生成AI利用より有利である。公式には、Copilot in Wordは法務・金融・コンプライアンス向けの高精細作業を念頭にTrack Changes、コメント、進捗表示を提供し、同時にMicrosoft 365信頼境界内で感度ラベルとDLPを維持すると説明される。さらに2026年3月の更新で、Purview DLPは**Web検索に機密情報が入ったプロンプトやプロンプト自体**を制御し、管理者は権威ソースや除外ドメインも設定できる。これらは、知財部が「社内機密を使うが外部検索の混入は制約したい」という設定を取りやすくする。³⁰

ただし、マルチモデル化にはサプライチェーン上の新しい意思決定が入る。ResearcherでClaudeを使うには管理者がAnthropicへのアクセスを許可する必要がある。Microsoftの文書ではAnthropicがsubprocessorとして顧客データ、サポートデータ、システム生成ログを処理しうること、また一部のAnthropic接続ソリューションはEU Data Boundaryに従わないことが示されている。したがって、**欧州案件、営業秘密、発明届、紛争資料、個人データの混在文書**を扱う組織は、Anthropic有効化を全社一律にせず、Matter分類や地域要件に基づく**段階的許可**にするのが現実的である。⁸

監査可能性は、知財部門にとって導入の分水嶺である。Microsoft Learnによれば、Copilotのプロンプト、応答、参照コンテンツは監査記録として保持され、eDiscoveryやコンプライアンス調査に利用できる。監査ログには、どのユーザーが、いつ、どこでCopilotとやりとりし、どのリソースにアクセスしたかが含まれる。

これは、後日「その無効主張はどの文献から出たか」「誰が商標クリアランスの一次判断をしたか」「どの契約雛形が参照されたか」を追えることを意味する。逆にいえば、ログ運用が未整備なままの導入は、AI利用の可視化だけが進み、説明責任体制が伴わない状態を生む。³³

導入時に最低限決めるべき統制論点は次のとおりである。ここは実務設計の中心であり、SLAや利用規約より先に、**社内ポリシーとしての許可・禁止・承認ルート**を明文化する必要がある。³⁴

論点	最低限の決定事項	知財実務での意味
セキュリティ	機密区分ごとに、Web併用可否、Council可否、外部モデル可否を決める。	発明届・訴訟方針・相手方草案の扱いを一律化しない。
データガバナンス	権威ソース、除外ドメイン、保持期間、Matterレベルを設定する。 ³⁵	「何を根拠にしたか」を後追いできるようにする。
モデル選択ポリシー	Critiqueを標準、Councilを高争点案件、単独モデルを検証用に限定する。	比較モードの乱用を防ぎ、レビュー負荷を平準化する。
検証プロセス	提出物・出願物・対外説明資料は必ず人間が原典照合する。	引用付与は事実確認の代替ではない。
監査ログ	Purview監査を有効にし、アクセスリソースも保存対象にする。 ³⁶	将来の紛争や監査で利用経路を示せる。
人的レビュー	代理人/弁護士/知財担当者の最終承認者をMatter種別ごとに固定する。	責任所在の曖昧化を防ぐ。
SLA・契約	subprocessor、通知義務、保持/削除、障害対応、監査協力、地域要件を確認する。	モデル切替や越境処理が発生した際の統制余地を残す。

運用フローは、次のように設計すると現実的である。公式の監査・DLP・Clarifying question・Track Changesの設計思想をそのまま知財実務に写像したものである。³⁷

flowchart TD

```

A[案件受付] --> B{機密区分}
B --> |高機密/特権性高| C[内部データ中心・Web制限]
B --> |中低機密| D[Web + Work IQ許可]
C --> E{目的}
D --> E
E --> |単一成果物を作る| F[Critique]
E --> |複数見解を比較する| G[Council]
E --> |基準比較・検証用| H[単独モデル]
F --> I[原典照合]
G --> I
H --> I
I --> J[Word/社内様式で修正履歴付きレビュー]
J --> K[最終承認]
K --> L[監査ログ・証跡保存]

```

規制・倫理・コンプライアンス

日本³⁸、米国³⁹、欧州連合⁴⁰の三極で共通しているのは、**AIの実務利用を一概に禁止していない**一方で、**人間による責任ある関与**を制度上・運用上で残している点である。知財実務に引き直すと、焦点はおおむね四つに集約される。すなわち、①発明者・著作権者は誰か、②学習・出力・引用に関する著作権リスクはどう見るか、③AIを扱う組織にどの程度のリテラシー・監督・記録が求められるか、④モデル提供者の透明性・copyright policy・訓練データ要約などの供給網義務をどう評価するか、である。⁴¹

法域	主要な公的立場・判例	知財実務での実務含意
日本	AI事業者ガイドラインはリスクベースアプローチ、透明性、セキュリティ・バイ・デザイン、アカウントビリティを重視する。文化庁は2024年にAIと著作権の考え方を整理し、判例蓄積が乏しい現状も明示した。2025年の知財高裁DABUS判決は、現行特許法上、発明者は自然人を前提とすることを示した。 ⁴²	発明届・インタビュー・出願草案では、人の寄与記録を必須にし、AIを発明者として扱わない。著作権では学習利用・出力利用の境界がなお流動的で、利用目的と市場代替性の精査が要る。
米国	USPTO ⁴³ の2025年改訂ガイダンスは、AI利用の有無にかかわらずinventorshipの法的基準は同一であり、別個の特例基準は設けないとする。2024年のUSPTO実務者向けガイダンスは、AI利用は可能でも合理的調査義務や責任ある利用が必要だとした。U.S. Copyright Office ⁴⁴ は2025年報告書Part 2で、生成AI出力の著作権性は既存法理で扱えるとし、純AI生成物への保護拡張に慎重である。さらに同Officeの関連資料は、学習利用をめぐる多数の訴訟が係属中であることを示す。 ⁴⁵	米国案件では、発明者認定・著作権性をAI任せにせず、人のsignificant contributionを記録する。契約・訴訟資料では、AI利用事実と検証責任の分担を内部ルールに落とす必要が高い。
EU	European Commission ⁴⁶ はAI Actの下で、Article 4のAI literacy義務が2025年2月2日から適用され、監督・執行は2026年8月3日から始まると示している。GPAI提供者にはtechnical documentation、copyright policy、training content summaryが求められる。GPAI Code of PracticeにはMicrosoft、OpenAI、Anthropicが署名している。EUIPO ⁴⁷ は、生成AIと著作権の研究で学習データ、opt-out、ライセンス市場を主要論点として整理し、Copyright Knowledge Centreでは著作権を「人間の創造的表現」に結びつけて説明する。European Patent Office ⁴⁸ もDABUS関係で、EPC上、発明者は人間でなければならないと確認している。 ⁴⁹	EU関連Matterでは、ユーザー企業はdeployersとしてAI literacyと人間監督を整え、供給網ではモデル提供者のcopyright policy・訓練データ要約・透明性をデューデリジェンス対象に入れるべきである。

倫理面では、**automation bias**、**過信**、**prompt injection**、**出所不明資料の混入**が中核リスクとなる。Anthropicの最新公式発表は、Claude Opus 4.7が一部で正直さとprompt injection耐性を改善したとしつつ、完全ではないと認めている。OpenAIもGPT-5.2 Thinkingについて、研究・文書分析・意思決定支援でのエラー率低下を述べながら、クリティカル用途では再確認を求めている。したがって、Copilot側のマルチモデル査読は重要な改善だが、それは**人間の最終レビューを免除する理由**ではなく、むしろレビューの着眼点を変える材料と理解すべきである。⁵⁰

評判・事例・批判的評価

現時点の評判を要約すると、**公式評価は強く、第三者の独立実証はまだ薄い**。これは機能が新しく、しかも Frontierでの早期提供段階にあることと総合的である。MicrosoftはCritiqueについてDRACOでの統計的有意な改善を示し、公式デモではsource reliability、report completeness、evidence groundingを前面に出している。日本語専門メディアはおおむね好意的で、役割分担の明快さやGPT/Claudeの使い分けの有用性を評価している。他方、コミュニティでは、マルチモデル自体は「複雑タスクには正しい方向」と評価される一方、トークン消費や継続的メモリ、比較要約の解釈可能性への懸念も出ている。つまり、現段階での評判は「筋は良いが、運用評価はこれから」が最も妥当である。⁵¹

ソース群	何を示しているか	信頼度	留意点
公式サポート・公式ブログ・ロードマップ	動作原理、利用条件、Frontier提供、監査・DLP・引用・Track Changesなどの機能範囲。 ⁵²	高	実装仕様の確認には最適。ただしROIや独立精度までは保証しない。
DRACO論文+ Microsoft評価	Critiqueのベンチマーク改善、法務領域の評価難度、LLM-as-a-judge手法。 ⁵³	中高	ベンダー実行評価であり、実案件の完全代替根拠にはならない。
大手報道	発表の市場の意味、hallucination低減やマルチモデル競争の文脈。 ⁵⁴	高	多くは企業説明に基づくため、機能の細部までは公式文書優先。
日本語専門メディア	役割分担や使い分けの分かりやすい解説、初期の実務感触。 ⁵⁵	中	速報性は高いが、実案件での検証量はまだまだ少ない。
コミュニティコメント	トークン消費、構造化討議、継続メモリへの利用者関心。 ⁵⁶	低	逸話的で再現性が低い。運用課題の気配を知る用途に留める。

直接の導入事例については、本調査で確認できた**Critique/Council固有の、知財部門または法律事務所の実名・成果数値付き事例**はまだ乏しかった。これに対し、Microsoftの法務向けシナリオライブラリや法務・金融・コンプライアンス向けWord機能の投入、そしてAzure上の法務特化AI事例では、一般目的AIだけでは**正確性、出所、プライバシーの不安**が残るという認識が前提に置かれている。このことは、CopilotのCritique/Councilが法務・知財で価値を持つとしても、それだけで専門DB、判例サービス、特許検索システム、法務特化AIを不要にするわけではないことを示唆する。⁵⁷

批判的に見るべき点は三つある。第一に、Microsoftの目立つ定量訴求はCritique中心であり、Councilの定量優位は今回の公式資料では示されていない。第二に、judge modelや内部モデル版が開示されていないため、同じプロンプトでも将来的な挙動変化を統制しづらい。第三に、法務・知財では「引用がある」と「その引用が結論を支える」ことは別問題であり、しかも日本や米国の生成AI著作権・学習利用法理はなお動いている。したがって、評判は基本的に前向きだが、**知財部門における制度的・監査的な信頼は、ベンチスコアよりも、運用ルールと検証ログの設計で決まる**と評価するのが妥当である。⁵⁸

推奨と導入テンプレート

推奨は、短期・中期・長期で分けると実装しやすい。短期は**用途限定パイロット**、中期は**統制ルールの制度化**、長期は**案件種別別の評価運用**である。特に知財では、特許・商標・著作権・契約・意匠・訴訟支援で正

解の構造が異なるため、全業務一律の「Copilot利用可否」より、**Matter**類型ごとの許容行為・禁止行為へ分解する方が失敗しにくい。 59

期間	推奨アクション
短期	Frontier参加のうえ、発明者インタビュー要約、社内向け争点メモ、競合技術調査、契約要点整理など 非提出物 から始める。Critiqueを標準にし、Councilは無効・訴訟・交渉・両論整理に限定する。Anthropic有効化は部門限定または地域限定で開始する。
中期	Matter分類表を作り、機密区分ごとに「Web可否」「Council可否」「添付ファイル可否」「外部モデル可否」を決める。Purview DLP、監査ログ、権威ソース、除外ドメインを設定する。人間の最終承認者を権利種別ごとに指名する。
長期	社内ゴールドセットで月次または四半期ごとに評価し、誤引用率、未解決論点の抽出率、先行技術候補の再現率、契約リスクの見落とし率を追う。必要に応じて専門DB連携やドメイン特化エージェントに移る。

初期導入のチェックリストは次のとおりである。

- どの案件類型にCritiqueを許可し、どの案件類型だけCouncilを許可するか。
- Anthropic有効化の対象者・地域・機密区分は誰か。
- Web検索を許可する案件と社内データ限定にする案件を分けたか。
- Prompts / responses / accessed resourcesの監査ログ保持を確認したか。
- 出願書類、裁判提出物、相手方提出文書など**対外文書**への直接利用を禁止したか。
- 引用元の真偽確認と、引用が結論を支えているかのレビュー手順を作ったか。
- 発明者寄与や契約意思決定の責任者を明記したか。
- EU案件についてAI literacy、GPAI供給網、データ境界の確認を行ったか。
- 米国案件についてinventorshipと著作権性の人間寄与記録を残すか。
- 日本案件についてリスクベース・透明性・アカウントビリティをどの文書で担保するか。 60

導入テンプレートは、次の形にすると運用文書へ落とし込みやすい。これは公式の機能範囲と監査機能を前提にした、知財部門向けの最小テンプレートである。 61

項目	記入内容の例
対象業務	先行技術調査の一次整理 / 契約差分整理 / 発明者インタビュー要約
対象法域	日本 / 米国 / EU / 複数法域
機密区分	公開情報 / 社内限定 / 営業秘密 / 特権性高
許容ソース	Webのみ / Work IQのみ / Web + Work IQ / 特定SharePointのみ
禁止ソース	相手方機密資料 / 未公開出願資料 / 個人データ含有メールなど
推奨モード	Critique / Council / GPT単独 / Claude単独
出力形式	要点メモ / 比較表 / リスク一覧 / ドラフト条項 / クレームチャート骨子
必須レビュー	原典照合者 / 法律レビュー者 / 知財責任者 / 提出承認者
監査要件	Purviewログ保存 / Matter番号付番 / 参照ソースの保存
禁止行為	そのまま出願提出 / 裁判提出 / 相手方送付 / 著作者・発明者の自動確定

プロンプト雛形も、単に「調べて」ではなく、法域・証拠・比較軸・残論点を指定する方がよい。Researcherの公式な推奨は「具体的に」「検索範囲を定義」「明確化質問に応答」であり、知財ではそれをさらに強める必要がある。¹⁵

目的:

[案件名]について、[法域]・[期間]・[対象権利]に限定し、社内資料と公開Webを用いて調査してください。

必要事項:

- 主要論点を3〜7項目に整理
- 各論点について根拠資料を必ず引用
- 不一致の見解がある場合は両論を比較
- 未確認事項と追加調査が必要な点を最後に列挙
- 事実、推論、仮説を明確に区別
- 出力は[1〜3ページ / 5ページ以内 / 表中心]で作成

禁止事項:

- 出典不明情報を断定しない
- 未確認の裁判例・文献を引用しない
- 発明者/著作者/最終法的判断を確定しない

最後に、参照図版・スクリーンショットを付すなら、**モデル選択サポート文書**のAuto / Model Council選択画面、**March 2026の“What's New”**にあるResearcher・Word・DLPの画面、**Word document workflows**のTrack Changes/コメント画面が一次資料として適切である。これらはUIの現況確認と、社内教育資料の付録作成に向く。⁶²

¹ ³⁵ <https://techcommunity.microsoft.com/blog/microsoft365copilotblog/what%E2%80%99s-new-in-microsoft-365-copilot--march-2026/4506322>

<https://techcommunity.microsoft.com/blog/microsoft365copilotblog/what%E2%80%99s-new-in-microsoft-365-copilot--march-2026/4506322>

² ¹⁷ ¹⁸ ²¹ ²⁴ ²⁶ ⁴⁸ ⁵¹ ⁵⁶ ⁵⁸ <https://techcommunity.microsoft.com/blog/microsoft365copilotblog/introducing-multi-model-intelligence-in-researcher/4506011>

<https://techcommunity.microsoft.com/blog/microsoft365copilotblog/introducing-multi-model-intelligence-in-researcher/4506011>

³ ¹⁶ <https://techcommunity.microsoft.com/blog/microsoftmechanicsblog/claude--gpt--multi-model-intelligence-in-copilot/4509773>

<https://techcommunity.microsoft.com/blog/microsoftmechanicsblog/claude--gpt--multi-model-intelligence-in-copilot/4509773>

⁴ <https://www.microsoft.com/microsoft-365/roadmap?id=552596>

<https://www.microsoft.com/microsoft-365/roadmap?id=552596>

⁵ ¹² ³³ <https://learn.microsoft.com/en-us/microsoft-365/copilot/microsoft-365-copilot-architecture-data-protection-auditing>

<https://learn.microsoft.com/en-us/microsoft-365/copilot/microsoft-365-copilot-architecture-data-protection-auditing>

⁶ ⁸ ¹³ ¹⁴ ¹⁹ ²⁰ ²² ²⁸ ³⁸ ³⁹ ⁴⁰ ⁴³ ⁴⁶ ⁴⁷ ⁵² ⁶¹ <https://support.microsoft.com/en-gb/topic/use-model-choice-in-the-researcher-agent-cf182434-02b7-4d6f-af25-c50111fc6bf6>

<https://support.microsoft.com/en-gb/topic/use-model-choice-in-the-researcher-agent-cf182434-02b7-4d6f-af25-c50111fc6bf6>

7 9 15 25 32 37 44 59 <https://learn.microsoft.com/ja-jp/microsoft-365/copilot/researcher-agent>
<https://learn.microsoft.com/ja-jp/microsoft-365/copilot/researcher-agent>

10 34 42 https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/pdf/20250328_1.pdf
https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/pdf/20250328_1.pdf

11 30 <https://techcommunity.microsoft.com/blog/microsoft365copilotblog/copilot-in-word-new-capabilities-for-document-workflows/4508974>
<https://techcommunity.microsoft.com/blog/microsoft365copilotblog/copilot-in-word-new-capabilities-for-document-workflows/4508974>

23 50 <https://www.anthropic.com/news/claude-opus-4-7>
<https://www.anthropic.com/news/claude-opus-4-7>

27 <https://openai.com/index/introducing-gpt-5-2/>
<https://openai.com/index/introducing-gpt-5-2/>

29 <https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/aiandcopyright.html>
<https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/aiandcopyright.html>

31 <https://www.uspto.gov/subscription-center/2026/new-ip-policy-bulletin-explores-generative-ais-role-design-patents>
<https://www.uspto.gov/subscription-center/2026/new-ip-policy-bulletin-explores-generative-ais-role-design-patents>

36 <https://learn.microsoft.com/en-us/purview/audit-copilot>
<https://learn.microsoft.com/en-us/purview/audit-copilot>

41 https://www8.cao.go.jp/cstp/ai/ai_guideline/ai_gl_2025.pdf
https://www8.cao.go.jp/cstp/ai/ai_guideline/ai_gl_2025.pdf

45 <https://www.uspto.gov/subscription-center/2025/revised-inventorship-guidance-ai-assisted-inventions>
<https://www.uspto.gov/subscription-center/2025/revised-inventorship-guidance-ai-assisted-inventions>

49 60 <https://digital-strategy.ec.europa.eu/en/faqs/ai-literacy-questions-answers>
<https://digital-strategy.ec.europa.eu/en/faqs/ai-literacy-questions-answers>

53 <https://arxiv.org/abs/2602.11685>
<https://arxiv.org/abs/2602.11685>

54 <https://www.reuters.com/business/microsoft-unveils-ai-upgrades-rolls-out-copilot-cowork-early-access-customers-2026-03-30/>
<https://www.reuters.com/business/microsoft-unveils-ai-upgrades-rolls-out-copilot-cowork-early-access-customers-2026-03-30/>

55 <https://www.sbbbit.jp/article/cont1/184362>
<https://www.sbbbit.jp/article/cont1/184362>

57 <https://adoption.microsoft.com/en-us/scenario-library/legal/>
<https://adoption.microsoft.com/en-us/scenario-library/legal/>

62 <https://support.microsoft.com/ja-jp/topic/researcher-%E3%82%A8%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%88%E3%81%A7%E3%83%A2%E3%83%87%E3%83%AB%E3%81%AE%cf182434-02b7-4d6f-af25-c50111fc6bf6>
<https://support.microsoft.com/ja-jp/topic/researcher-%E3%82%A8%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%88%E3%81%A7%E3%83%A2%E3%83%87%E3%83%AB%E3%81%AE%cf182434-02b7-4d6f-af25-c50111fc6bf6>